

令和 5 年 10 月 23 日現在

機関番号：28001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02562

研究課題名(和文) 学校における民俗芸能の実践と継承：「接触体験」としての文化継承の視点から

研究課題名(英文) Practice and Transmission of Folk Performing Arts in School: Cultural Transmission as Contact Experience

研究代表者

呉屋 淳子 (GOYA, Junko)

沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：10634199

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「接触領域」、「接触体験」という分析的視点をもとに、東日本大震災で被災した宮城県亘理郡山元町を考察の対象とし、現代の地域社会に生きる人々がどのように民俗芸能を認識し、受け継ごうとするのかという現代的なテーマに取り組むことを目的とした。同時に、現代的な文脈における文化継承のあり方や新たに生み出される芸能を視野に入れ、かつ歴史的経緯を考察の対象に据えながら、学校と地域の相互行為から民俗芸能が刷新され、継承される過程を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民俗芸能における継承の「危機」は、これまで長く論じられてきたが、一般的に「後継者不足」や保存・継承の正当性といった問題が議論の中心となる傾向が強く、民俗芸能そのものの柔軟性や可変性については看過されてきた。本研究では、「接触」という局面に着目することで、「変化」そのものを継承の要素として位置づけ、その実態を芸能に関わる複数のアクターの相互作用として分析した。また、映像民族誌の制作に取り組むことで、学術論文に限定されないマルチモーダルな研究成果のアウトプットを実現した。映像民族誌の制作そのものが地域社会との協働的な実践であり、公共人文学的な学術研究のあり方を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：Based on the analytical perspectives of "contact zone" and "contact experience," this study aimed to address the contemporary theme of how people in contemporary local communities perceive and try to inherit folk performing arts, taking Yamamoto-cho, Watari-gun, Miyagi Prefecture, which was affected by the Great East Japan Earthquake, as the research subject. At the same time, we analyzed the process of renewal and transmission of folk performing arts from the interaction between school and community, taking into account the way of cultural transmission and newly created performing arts in the contemporary context, and setting the historical background as the research subject.

研究分野：文化人類学

キーワード：学校芸能 接触領域 接触体験 レジリエンス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現代の地域社会において、民俗芸能は、必ずしも地縁や血縁、出自など共同体的な紐帯を基盤としたコミュニティではなく、都市化や高齢化、住民の流入などに応じて、さまざまな環境をもったコミュニティのなかで継承されている。本研究は、変容する現代社会の地域社会の中で、民俗芸能を継承する場としての学校に着目し、学校と地域社会の相互作用の中で刷新されながら継承される民俗芸能の実態を明らかにする。さらに、学校という場を、異なる背景や文化的アイデンティティ、指向性を持った複数のアクターによる「接触領域」と捉えることで、人々の民俗芸能の継承に対する意識が、その相互交差的な「体験」を経る中で、いかに形成され、また変容していくのかを明らかにする。

2. 研究の目的

近年、公的に制度化された学校教育の現場において伝統芸能や民俗芸能の教授がおこなわれるようになったことから、芸能の継承をめぐる状況は大きく変化している。一方、学校もまた、今日において地域社会との連携が強化されることで、より地域社会の動向の影響を受けるようになってきている。たとえば、東日本大震災以降、被災地域の学校においては、地域の復興と被災した民俗芸能の保存と継承に関わる現状と課題が学校のなかにも持ち込まれるようになった。それは、文化的伝統の正当性と被災地の現実的問題が混在する日常の中で、帰属性を問わない学校と地域が関わりながら行われている。被災地を対象としたこれまでの研究によって、地縁・血縁といった帰属性を問わない学校という場と地域社会との関わりの中で、民俗芸能の実践を通じ、新たなコミュニティが形成されていることが明らかになった。

そこで本研究では、学校と地域の相互行為の中で生起するコミュニティにおいて実践される民俗芸能に着目し、民俗芸能の継承をめぐる議論をより発展的な視点から検討することを目的とする。その際、現代的な文脈における民俗芸能の継承やそのあり方を動体的に捉え、民俗芸能を創造する場としての学校を「接触領域」という視点から包括的に検討する。

3. 研究の方法

本研究は、3年計画とし、資料調査および現地調査・映像民族誌の制作を実施する。本研究のリサーチクエスションは、被災地の学校教育における民俗芸能の教授は、現代の地域社会を生きる人々の日常における文化的実践の中でどう位置づけられ、地縁的にも血縁的にも異なる人々が民俗芸能の実践を通して新しいコミュニティを生み出していることとどのように関係しているのか、「接触領域」としての学校と地域社会の双方が関わり合いながら、民俗芸能の継承に力が注がれるとき、そこでは何が「体験」されているのか、そしてそれがその後の取り組みにどう影響しているのか。その一方で、学校教育で実践される民俗芸能が複雑なアクター(政治性、文化・歴史性)と関わることによって、指導者の教授内容やその方法が取捨選択され、芸能が変容・持続する過程にどのような影響を与えているのか、の3点である。

4. 研究成果

民俗芸能における継承の「危機」は、これまで長く論じられてきたが、一般的に「後継者不足」や保存・継承の正当性といった問題が議論の中心となる傾向が強く、民俗芸能そのものの柔軟性や可変性については看過されてきた。一方で、東日本大震災以降、民俗芸能の実践は、地域再生の「原動力」として捉えられ、地域コミュニティの復興に民俗芸能が果たす役割について積極的な議論がなされてきた。たとえば、民俗芸能の継承についてコモンズ論の考え方に基づき、管理アプローチの視点から保存会内部の活用に様々な関わりをもつアクターに限定する見方を示す論考がある(俵木悟 2018 『文化財/文化遺産としての民俗芸能』)。これらの議論は、地域社会において実践されている民俗芸能に注目したものが多く、地域社会や保存会の内部の論理に焦点が置かれている。

しかしながら、現代において、地域とは決して一枚岩なものではなく、災害や人口流出などさまざまな脆弱性を孕んだものである。従来民俗芸能研究が主な対象としてきた地域社会や保存会だけでなく、学校と地域社会、あるいは学校と保存会との間に生じる相互作用に着目してみると、学校が民俗芸能の継承の場として地域社会と関わりながら機能していることだけでなく、芸能の継承のあり方をめぐって地域ごとの特異性が複雑に入り込む場であることが明らかになった。具体的な事例としては、宮城県亘理郡山元町にある小学校と神楽保存会における「坂元こども神楽」の取り組みでは、震災後の地域社会の中で、大人の担い手たちが継承の危機に直面する地域の芸能を子どもたちに教えるという実践を通して人々の関係性が編み直され、学校での芸能実践が「新たな伝統」として地域社会に根づきつつ、人々のつながりを回復させる原動力となっている。こうした事例は「復興」の物語の中で語られることが多いが、なぜ芸能が「地域再生」の原動力になりうるのかという過程や仕組みの理解は十分に進んでいない。そこで本研究では、「実践コミュニティ」や「接触体験」という切り口から、「坂元こども神楽」に関わる世代や

立場の異なる多様な人間同士がどのような関係性を結びながら、文化継承に関わっているのかを現場の視点から検証してきた。

このように変容する現代の地域社会の中で、「地域の伝統」の継承に困難を抱えている当事者は多い。現在の日本において、地域の文化継承に対するアプローチは「保存」から観光や地域振興への「活用」へと舵を切っている。しかし、「地域の伝統」の価値とは、必ずしも経済的な基準のみで測られるものではない。地域社会における持続可能な文化継承を図るためには、「保存」と「活用」の二分法とは異なる、別のアプローチが必要である。

「坂元こども神楽」の事例は、学校や公民館といった教育的な場での実践が、関係性の構築や社会的な合意形成、価値創造といった観点から、地域の文化継承において「保存」や「活用」とは異なる可能性をもつことを示唆している。それを明らかにするためには、個々の現場の実証から地域社会における文化継承の社会的な価値を理論化していく作業が今後は必要である。

また、文化継承をめぐる社会課題の解決を目指すには、理論化を机上の作業に終わらせることなく、当事者である地域住民と課題への理解を共有しながら、共にアイデアを練り上げていく過程も不可欠であると考えられる。

本研究では、「接触」という局面に着目することで、「変化」そのものを継承の要素として位置づけ、その実態を芸能に関わる複数のアクターの相互作用として分析した。さらに、異なる複数のアクターの「接触体験」を詳細に記述・分析することで、その実態をミクロな視点から解明した。また、映像民族誌の制作に取り組むことで、学術論文に限定されないマルチモーダルな研究成果のアウトプットを実現した。映像民族誌の制作そのものが地域社会との協働的な実践であり、公共人文学的な学術研究のあり方を示すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 呉屋淳子
2. 発表標題 「『まーすけーい歌』の記憶を共有するーパブリック・ヒューマニティーズの視点から考える歌の継承ー」
3. 学会等名 日本民俗学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 呉屋淳子
2. 発表標題 「歌の記憶を共有する 地域芸能から見る沖縄の音楽文化の現在と未来」
3. 学会等名 ソウル大学人類学科BK21教育研究院研究講演会（オンライン）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 呉屋淳子、向井大策	4. 発行年 2022年
2. 出版社 沖縄県立芸術大学	5. 総ページ数 288
3. 書名 地域芸能と歩む	

1. 著者名 李善姬、高倉浩樹	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新泉社	5. 総ページ数 273
3. 書名 震災〈後〉を生きる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

地域芸能と歩む

<https://www.chiikigeinou.com/event/kodomogeinokoryukai/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	向井 大策 (MUKAI Daisaku) (10466980)	沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授 (28001)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------